

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520627

研究課題名(和文)ネイティブスピーカー信仰を超えて

研究課題名(英文)Overcoming native-speakerism

研究代表者

Houghton S. A (Houghton, Stephanie)

佐賀大学・文化教育学部・准教授

研究者番号：00382416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：ネイティブ・スピーカリズム(NS)とは言語教員に影響を与える言語に基づいた偏見である。(1)日本在住の13人の英語教員は皆NSを様々な形で経験している。(2)日本語教員間ではネイティブ・スピーカー、母語話者の用語の使い分けがある。母語話者の優位性を意識しながら、学習者の必要に応じた教育を試みる教員の葛藤が伺われた。(3)NSが拒否されれば、どのような条件で言語教員は雇用されるべきか。専門家は外国語教員の教育活動が変わる必要があり、又その望ましい特質についての議論が必要であるとした。成果は共著本(Houghton, Rivers&橋本：ラウトレッジと2015年3月契約)で発表する。

研究成果の概要(英文)：Native-speakerism is a language-based form of prejudice affecting language teachers.

(1)13 English teachers living in Japan reported experiences of "native-speakerism" in different ways.(2)The Japanese original term of native-speaker and the loanword are used differently among Japanese language teachers. Being conscious of the superiority of native-speakers, they have been trying to accommodate needs of the learners.(3)If native-speakerism is rejected, on what grounds should the language teachers be employed? ICC, WE and ELF experts identified shifts needed in the educational activities of the foreign language teacher, and desirable characteristics of the foreign language teacher. The main outcome is a co-authored book with Routledge (Houghton, Rivers & Hashimoto, contracted in March 2015)

研究分野：社会教育学

キーワード：ネイティブ・スピーカリズム

1. 研究開始当初の背景

ネイティブ・スピーカリズムとは言語教員に影響を与える言語に基づいた偏見である。それは、世界での英語の地位の上昇(Crystal, 1997)、英国などの「中枢国」が世界に言語・文化上の規範を示し、他がそれに従うべきであるという見方(Kachru, 1985)、及び言語帝国主義(Phillipson, 1992)に対する一種の脅威感から生じたものと考えられる。また、それは非母語話者言語教員(Holliday, 2006等)及び母語話者言語教員(Houghton & Rivers, 2013)の雇用等における差別につながっている。「母語話者」を固定化し崇拝することは21世紀の日本における需要を考える上で問題であり不適切である。

2. 研究の目的

リバーズ:

日本における英語ネイティブ・スピーカリズムの固有の性質、広く認識されている特徴とは何か。

橋本:

日本における日本語ネイティブ・スピーカリズムの特徴は何か。

ホートン:

ネイティブ・スピーカリズムが拒否されるとすれば、どのような条件で言語教員は雇用されるべきであるか。「ネイティブ・スピーカー」モデルを拒否している分野 - 異文化間コミュニケーション能力(ICC)、世界の英語(WE)、及び共通語としての英語(ELF)の専門家に聞く。

3. 研究の方法

リバーズ:

- 日本におけるネイティブ・スピーカーの概念の社会的・歴史的分析。
- 日本の英語教員にアンケート、追跡イン

タビューを行う。

- JREC-INの求人広告の分析。

橋本:

- 外国語としての日本語教育に関する教育政策における日本語ネイティブ・スピーカーの構築について公文書を批判的ディスコース分析
- 日本における日本語ネイティブ・スピーカリズムの特質を探るために日本での日本語教員にアンケート、追跡インタビューを行う。

ホートン:

- 世界のICC、WE、及びELFの専門家にインタビューを行い、将来における言語教員の今日的な「ポスト・ネイティブ・スピーカリスト」のあり方を探る

4. 研究成果

リバーズ:

日本にて指導経験のある13名の教員よりインタビュー、「ネイティブ・スピーカリズム」を全員が経験。しかしながら、その参加教員たちの経験に基づくストーリーは「ネイティブ・スピーカリズム」としての定義は様々であった。すなわち、「ネイティブ・スピーカリズム」について話したときに同様の概念を持たず個々の経験を基にそれぞれが定義していた。

「ネイティブ・スピーカリズム」について談話した際、いわゆるネイティブ・スピーカーが加害者側であり非ネイティブ・スピーカーが犠牲者側として参加者全員が定義付けていた。したがって言語に基づいた先入観や偏見が一方向にしか向いていないことを表す。この談話にて参加者全員が一般的な観点として非ネイティブ・スピーカーは「ネイティブ・スピーカリズム」から保護される必要があるという見解を表した。

談話の多くは雇用先でのポリシーや職場でのネイティブ・スピーカーとしての経験により基づいている。日本以外の国籍が「英語のネイティブ・スピーカー」であるということを示す、すなわち日本国籍を持つ「英語のネイティブ・スピーカー」はいないということを示していた。参加者の多くは、職場内ではクリアな専門用語を使って言語ステータスにおいて何が重要であるかを明確にする必要があると強調した。

上記の証拠付けとなる 292 の求人広告データを JREC-IN ウェブサイトより集計。集計結果より、ネイティブ・スピーカーが求人公募の雇用の資格として求人広告の 63%(n=184)をしめた。そのうちの 34% (n=102)が「ネイティブ・スピーカー」を用い、15.4% (n=45)が「ネイティブもしくは」を用い、in 8.9% (n=26)が「ネイティブ」を用い、3.8% (n=11)が「その他」を用いていた。インタビュー参加者による強調された視点に関連し、決まり文句として「ネイティブ・スピーカー」という用語の使用がいかにあいまいで定義されにくいを示す。用語が常識として使用され、それに定義を必要としないとするのは問題であろう。

橋本:

日本語教師の母語話者性について考えを知るために、まず、日本との経済連携協定 (EPA) に基づくインドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者に対する日本語予備教育事業について関係者と会談。既存研究は国家試験・教材が中心で、母語話者・非母語話者としての教員の視点から見たものが少なく、アジアにおける日本語という観点からも EPA にかかわる日本語教育はネイティブ・スピーカリズムを考察する上で理想的な研究材料であることを確認。調査を行った 32 名の日本語教員 (大学勤務 7 割) の約 9 割が海外日本語教育の経験があり、多数が海外に

行って初めて非母語話者教員と共に教える経験をしている。これは自分を母語話者であることを国内ではほとんど意識することがなかったという解答と関連。EPA の試験で振り仮名をつける配慮等について賛成するが、それに伴う所謂「やさしい日本語」については人工的で押し付けられたものとして懐疑的な意見が多数。「ネイティブ・スピーカー」「母語話者」の用語の使い分けがあり、英語と日本語の母語話者では意味が必ずしも同じでないことが判明。日本語の母語話者の優位性を意識しながらも、学習者の必要に応じた教育を試みる教員の葛藤が伺われる。

以下の学会発表 (日本、オーストラリア、香港) で結果を発表:

2014 年 11 月 “Japanese native speakerism and the future of “yasashii nihongo”: The impact of the Economic Partnership Agreement scheme for trainee nurses and care workers on Japanese language teaching in Japan”. 第 10 回国際日本語教育・日本語研究シンポジウム、香港大学。
2014 年 9 月 “Native-speakerism: Views of Japanese language teachers in Japan”. 第二回ネイティブ・スピーカリズム国際シンポジウム、佐賀大学。

2014 年 8 月 “Native-speakerism in Japanese language teaching in Japan”. パネル発表。AILA (Association Internationale de Linguistique Appliquée) World Congress、ブリスベン。

2014 年 7 月 “The impact of the Economic Partnership Agreement (EPA) scheme for Asian trainee nurses and care workers on Japanese language teaching in Japan”. オーストラリアアジア研究学会、西オーストラリア大学、パース。

ホートン:

ネイティブ・スピーカリズムが拒否されるとすれば、どのような条件で今後の言語教員は雇用されるべきか。ICC、WE、及び ELF

の専門家とのインタビューでは、外国語教員の教育活動が変わる必要があること、又、外国語教員の望ましい特質についてが焦点になった。教育活動については多言語主義、非母語話者性、及び言語バラエティーがネイティブ・スピーカー・モデルよりも優先されるべきであるという点で合意。目標言語をあらかじめ定義された既定種（アメリカ、イギリスのような）の言語規範の集まりとして捕らえるよりも、教員は異文化インタラクションから生じるものとして捕らえるべきである。しかし、言語教育の現場で誰のインタラクションが優先されるべきであるかという現実的な問題については意見が分かれた。非母語話者だけか。母語話者・非母語話者両方か。どの言語バラエティーか。外国語教員の特質については、教員はコミュニティーの部外者として外国に住んだ経験が必要であるという点で合意。又、教員は今日のグローバル化した世界で必要とされる様々な技術や知識 - 異文化コミュニケーション能力、既存の知識体系を批判できる能力、新種も含めた多様な英語に寛容であること - があることが求められる。これは教員が言語交渉技術を必要とすることを意味する。

2014年4月：第一回国際シンポジウム準備・発表・参加（ダラム大学）。2014年8月：AILA世界学会パネル準備・発表・参加（ブリスベン）。2014年9月：第二回国際シンポジウムの責任者として準備・運営・発表（佐賀大学）。会議後、プロシーディングを佐賀大学の国際交流推進センターから60万円の資金を得て出版した。2015年1月：基調講演（長崎県庁からの招聘）。2015年3月：シンポジウム発表原稿を元にした共編本案を出版社（スプリンガー）に提出（Houghton & Hashimoto）。2015年3月：成果をまとめた共著本をラウトレッジと契約（Houghton, Rivers & Hashimoto）。

当初の目標を超える成果を達成した。最終年度である本年度は以前に集計したデータを管理・分析・集計し、4つの学会（オーストラリア、日本、イギリス）で研究成果を発表。特に佐賀大でのシンポジウムは大成功に終わり、優秀な論文を集めた共編著本を出版者（Springer）と契約することができた。また、2015年1月：AILA 国際会議（2017年リオ）における、ReNとして指名された（佐賀シンポ参加の研究者11名）。さらに、2015年1月：異文化コミュニケーションと言語教育ブック・シリーズ（スプリンガー：ネイティブ・スピーカリズムはシリーズの基本概念の一つ）の編集者として指名され現在に至る。そして2015年3月：プロジェクトの成果をまとめた共著本の契約をラウトレッジとかわすことができたのは最大の収穫である（Houghton, Rivers & Hashimoto）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 10 件）

Houghton, S.A. (2014) Native-speakerism and beyond: Constructing the vision of the post-native-speakerist language teacher. *AILA 2014 World Congress*. Brisbane, Australia, 10-15th August 2014. Panel presentation with Andy Kirkpatrick (Griffith University, Australia), Kayoko Hashimoto (University of Queensland) and Damian Rivers (Future University, Japan).

Houghton, S.A. (2015) Native-speakerism and post-native-speakerist pedagogy. Keynote speech at the 2014 ALT Skill Development Conference, January 2015. Invited by Nagasaki Prefectural Board of Education.

Houghton, S.A. (2014) Post-native-speakerist pedagogy 2nd International Symposium on Native-Speakerism, Saga University, Japan. 28-30th September 2014.

Houghton, S.A. (2014) Native-speakerism: Intergroup Dynamics in Foreign Language Education. 1st International Symposium on Native-Speakerism, Durham University, England. 28th April 2014.

Houghton, S.A. (2014) Replacing the native-speaker? Views from the fields of ICC, WE and ELF. 1st International Symposium on Native-Speakerism, Durham University, England. 28th April 2014.

Rivers, D.J. (2015, March). Discursive Representations of the Native Speaker as Qualification for Employment. Roundtable paper presented at the American Association for Applied Linguistics (AAAL) 2015 Conference, Fairmont Royal York, Toronto, Canada.

Rivers, D.J. (2015, March). Speakerhood Status, Institutional Discourse and Voices from the Inside: An Exploration of the Native-Speaker Criterion and Native-Speakerism in Japanese Higher Education. Invited plenary talk presented at The Center for English as a Lingua Franca Forum: Language Teaching in the Asian Context, Tamagawa University, Tokyo, Japan.

Rivers, D.J. (2014, December). The Discourse of Desire and sought after Skills in Language Teacher Recruitment. Paper presented at the Sixth Centre for Language Studies International Conference (CLaSIC), National University of Singapore, Singapore.

Rivers, D.J. (2014, September). Trainee Teacher Narratives: Native-Speakerism in the Japanese Context. Paper presented at the Second International Symposium on Native-Speakerism, Saga University, Saga, Japan.

Rivers, D.J. (2014, August). Narrative Explorations of the Burden of Speakerhood. Paper presented at the AILA World Congress 2014, Brisbane Convention & Exhibition Centre, Brisbane, Australia.

〔図書〕(計 2 件)

Houghton, S.A., Rivers, D.J. & Hashimoto, K. (出版予定) *Beyond Native-Speakerism: Current Explorations and Future Visions*. London: Routledge.

Houghton, S.A. & Hashimoto, K. (出版予定) *Towards Native-Speakerism: Dynamics and Shifts*. Singapore: Springer.

〔産業財産権〕なし

〔その他〕
ホームページ等
<http://www.djivers.com/>

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
Houghton S.A. (ホートン ステファニー)
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号：00382416
- (2) 研究分担者
Rivers D.J. (リバーズ デミアン)
公立はこだて未来大学・システム情報科学部・准教授
研究者番号：00515455
- (3) 連携研究者：なし
- (4) 研究協力者
橋本佳代子 (HASHIMOTO Kayoko)
クイーンズランド大学(オーストラリア),
Faculty of Humanities and Social Sciences,
School of Languages and Cultures, Lecturer